

宮川大橋の渡り初め

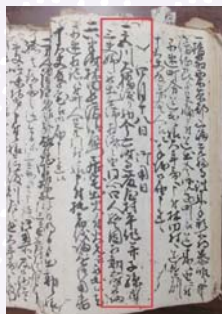
平成二十二年六月号の広報から始まったこの連載も、今回で一〇〇回を迎えることができました。毎月楽しみにしていただいているという皆様のお言葉を励みに、ここまで続けることができたことを厚く御礼を申し上げますとともに、これから少しでも町の歴史を伝えていけるよう頑張りたいと思います。

さて、今回は一〇〇回の記念というわけではありませんが、めでたい話を紹介します。

津山城の東側を流れる宮川にかか



現在の宮川大橋



町奉行日記の渡り初めの記述
(津山郷土博物館所蔵)



手前より平作・甚四郎・六次郎の墓
(香々美・高宮家墓地内)

その後順調に工事は進み、翌明和七年の三月初めには渡り初めの準備が始められました。

橋の渡り初めの式典では、現代でも一家の三世代の夫婦が渡り初めを行う風習が全国的にあります。その起源や理由は明らかではありませんが、一家に三世代の夫婦が元気でいることは縁起が良く、このように橋も丈夫で末永く続いて欲しいという願いが込められているのでしょうか。

宮川大橋の渡り初めについては、町奉行日記によれば、三月九日に町奉行所から、「近々宮川大橋が完成するので、三世代の夫婦がいれば、今月中に申し出るように」と、大年

寄（城下町の責任者）に命じます。しかし、四月に「城下町にそのような家は三・四家あるのですが、年をとりすぎて歩行困難であったり、病

身のため渡り初めには参加できません」との報告があります。そのため、「同一世帯でなくても、血縁のある三世代夫婦でよいから、もう一度探

してみても四月十二日までに報告がほしい」と再度搜索を命じますが、城下町ではこれに該当する者を見つ

けることができませんでした。その後、城下町以外の津山藩の領

地内まで搜索の範囲を広げたと考えられ、結局選ばれたのは、藤屋村（香々美）の平作（八十五歳）・甚四郎（五十七歳）・六次郎（二十六歳）の三世代夫婦で、四月十八日午前六時に多くの見物人と警護の役人のにぎわう中、宮川大橋の渡り初め式が執り行われ、平作らには祝儀として金二百疋（一両の半額）ずつ、鳥目一貫文（銅銭約一、〇〇〇枚）、酒肴が配られました。子孫の家では、その際に「高宮」の苗字の使用と帯刀を許され、脇差一振り（脇差）を賜ったという言い伝えも残されています。

橋が完成しても肝心の三世代夫婦を見つけることができない津山藩の役人の焦りや、この話を耳にしてからわずか数日後には渡り初め式に出席したであろう平作らの心情は記録には残されていませんが、まさに急展開の出来事であったことでしょう。いずれにしても、城下町のこのような式典に、現在の鏡野町域の住人が大きな役割を果たしたことは、貴重な歴史の記録です。

参考資料：『津山松平藩町奉行日記五』津山学こ
とはじめ
協 力：津山郷土博物館、高宮樟

生涯学習課 田下

電話(0868)54-7733